

第十七帖

絵合えあわせ

須磨の巻、出で来たるに、
中納言の御心、騒ぎにけり。

源氏の「須磨の巻」が出て
きたところで、中納言（頭の
中将）は動揺しました。

ろくじょうのみやすどころ
六条 御息所 亡き後、源

氏の殿が養女に迎えた 齋宮さいぐう
の姫君は、後宮にあらがれ、
今は 齋宮さいぐうの 女御にょうごとおつ
しやいます。

帝より九歳お年上のため、
最初はおなじみになれなかつ
たのですが、絵を好まれた帝
は、絵の上手の齋宮女御に、
次第に心移していかれます。

このことに慌てたのは、

弘こ徽き殿でん 女御にようご の父君のの 権ごんの

中納言ちゆうなごん

頭の中將とおっしゃったお若い頃より、源氏の殿とは何かと因縁がおりのお方です。

弘徽殿女御方は今物語、齋宮女御方は昔物語と、双方、絵の競い合いとなり、帝の御前でえあわせ絵合えあわせが催されることになります。

いずれ劣らぬ名品揃いでしたが、最後に出された、須磨時代の絵日記が勝敗を決します。

冷泉帝の後宮を制して、源氏一門はまさに栄耀の極み。しかし源氏の殿は世をはかнами、そのお心には、出家の願いも兆し始めているのです。

（文・小金陽介）